兵庫県教育委員会丹波教育事務所　学校問題サポートチーム

TNBだより

令和7年5月号

学級経営を考える　～学級担任のＡＢＣ～

新しい学級に慣れてきた頃、子どもたちの状況はいかがですか。先生の元気な姿が、子どもたちの学校生活を支えますね。これまで伺ってきた様々な実践から、今回は学級経営を考えてみます。

学級は、何のためにあるのでしょうか？

学級は、子ども達が社会の形成者になる練習をするための「疑似社会」です。

☆ それぞれの違いを認め合いながら、人間関係を築いていく場所。

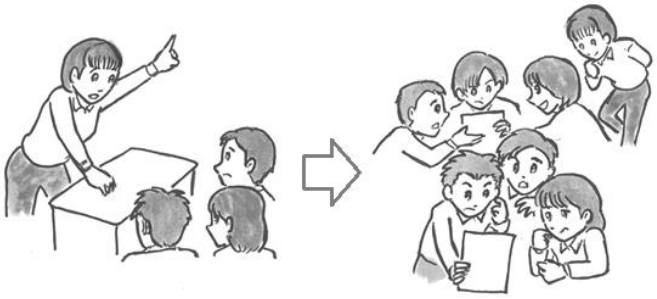
☆ 課題を解決する方法と、そのために自分のやるべきことを考える場所。

学級は、関係づくりと解決の方法を学ぶ場所

ですから、子どもが主役。担任は伴走者になって、子どもたちを成長させることが基本です。

☆ トラブルや失敗から学ばせる。自身で解決方法を考えさせる。

☆ ダメなことはダメとはっきり伝える。



担任は、まず方向を示して、それから子どもに伴走する

生徒指導を成り立たせるのは、信頼関係とタイムリーな関わりです

信頼関係ができてこそ、言葉が子どもの心に届きます。上から目線では誰もついてきません。

☆ ほめるところを常に探す。会話、一緒に行動、尊敬の3つで子どもの良さに目を向けられる。

☆ 叱る時は、感情で怒らず、冷静に、１対１で、人格ではなく行為を叱る。
☆ １つ叱ったら、その日のうちに３つほめてフォローする。

☆ 公平とタイムリーとスピードが鉄則。見逃しておいて「後で指導」はダメ。

子どもは、担任を信頼するから、応えようとする

活動した満足感とわかった喜びが授業にあれば、学級が安定します

子どもの居場所は、どの子どもも安心して活動できる授業によってつくられます。

☆ 詰め込まずに簡潔な内容と指示。
そして、ドラマチックな展開。

☆ 子どもの意見を、子どもにつなぐ。
どの子の意見も全員で大切にして、
学ぶ意欲と人権意識を高める。

☆ 学ぶ力の弱い子どもが活動できるか。
子どもが確認・発見・伝え合う授業に。

一問一答は、特定の子どもとのやり取りで進みます。
大半の子どもは、板書の筆記だけになりがちです。

わかる・活動できる・つながれる授業をつくりたい

変化に気づき声をかけるのが大事なのは、子どもだけでなく大人にも

自分の子を迎える時刻にあわただしく帰宅して、炊事。子どもを寝かせて、一緒に寝て、夜中に起きて家事、それから授業準備という状況はありませんか。自分を守ることは職業人の要（かなめ）です。

☆ フルコースの用意ができなくても、子ども同士のやり取りを優先する。

☆ 自分の不調は自覚しにくいもの。職員同士が変化に気づいて声かけを。

☆ 遠慮せずに相談。悪化するより、相談して早期対応がすべての人に利益。

心・体・家庭を守りながら、自分が何をやったではなく、子どもの行動や成長を楽しめる先生になりたいですね

☆☆☆学校訪問から☆☆☆

気持ちを言葉にして落ち着きを実現

小学校低学年から、集団に適応できずに対人トラブルを起こす子どもが増えているようです。教室に入れず、暴言暴力、反抗を繰り返していた児童が、専門家のアセスメントに基づく様々な取組で落ち着いていった例から、支援方法の一つを紹介します。

「消えろ」「死ね」の表現しかできない児童でしたが、児童の心情を、職員全員でその都度言葉にしていったそうです。「腹立ったな」「うれしいね」「悲しいのではない？」（感情の言語化）

効果　①「先生がわかってくれている」という思いや安心感が少しずつ育った　（共感）
　　②自分の心情を客観的にとらえる経験を積み重ねた　（感情支援・メタ認知）

短期間で急激には変わらないですが、年々、先生との関係や感情の制御が改善され、今では集団活動に参加して、役割を果たしたり自分の力を発揮したりできるようになっていました。

問題行動の要因は様々ですので、個々にアセスメントが必要ですが、一つの例として。